

## タンポポの花茎の奇形

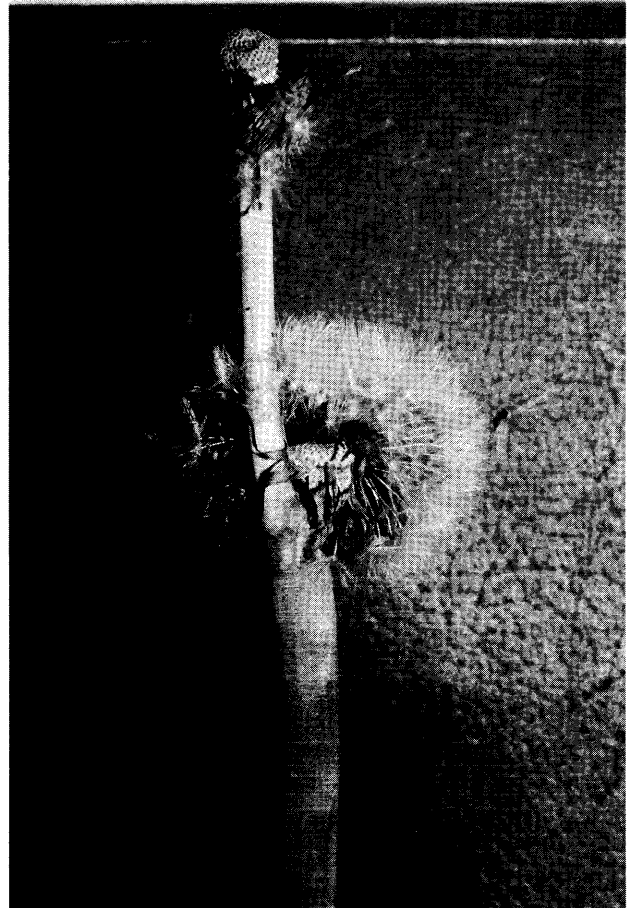
櫻井 幸枝

平成 19 年 5 月 24 日、長岡市内の自宅庭にてかわった花茎のタンポポを見つけた。タンポポの頭花は、株の根元から伸びる一本の茎に 1 つ付くのが一般的に見かける姿である。ところが、このタンポポは、茎の途中にも頭花がひとつ付いている。

最初は帯化現象かと考えたが、タンポポの花に見られる帯化は、茎が带状になり、頭花がぐにゃぐにゃと不規則に大きくなる姿をしたものを写真で見たことがあるので、これとは異なった現象のようである。このタンポポの場合は、途中についた頭花より下の茎は、それより上の茎に比べて太くなっている、太くなった部分は茎が 2 本分くっついたとも考えられる。

タンポポの頭花（つばみ）は、株の根元に 1～複数個形成され、次々と咲くが、先に伸張した茎（頭花が頂生している方の茎）と、その後伸びだした茎（頭花が途中になっている茎）が何かの理由でくっついた可能性を考えた。

すでに結実しており総苞片を見ることはできなかったが、タンポポの種類はおそらくセイヨウタンポポと思う。



## ヒノキバヤドリギの寄生

石沢 進

ヒノキバヤドリギの生育に関する情報が、新潟日報（2008 年 7 月 23 日）で報道された（添付記事参照）。記者の取材の際に、その分布や寄主植物などに関して詳細に説明したのに、間違いがあったり、その内容について十分掲載されていないので、補足しておきたい。

ヒノキバヤドリギは、ツバキ以外の次の植物 60 種以上にも寄生することが報告されている。

ブナ科（シイ）；ヤマグルマ科（ヤマグルマ トリモチ）；クスノキ科（クスノキ、ヤブニッケイ、ハビワ、タブノキ、シロダモ）；バラ科（カマツカ、ニワメ、イクリ、サクラ (sp.)）；マンサク科（イヌノミ）ミカン科（ユズ、ミカン）；トウダイグサ科（ヒメスズリハ）；ツゲ科（ツゲ）；ウルシ科（ハゼノキ）；モチノキ科（イヌツゲ、モチノキ、タミスギ、ナメノキ、ソゴ、クロガネモチ）；カエデ科（ヤマモシロ）；ニシキギ科（コマユミ、マサキ、モクセイ）；ホルトノキ科（ホルトノキ、コハンモチ）；ツバキ科（ツバキ、ヤブツバキ、サザンカ、ハナビサカキ、ヒサカキ、サカキ、モッコク、チャ）；グミ科（アキギリ、ナツハシ

ゴ）；ザクロ科（ザクロ）；フトモモ科（アデク）；ツツジ科（ネジギキ、アセビ、ミツハツツジ、ヤマツツジ、オンツツジ、ツクシカツツジ、シヤンホ、スノキ）；カキノキ科（クロキ）；ハイノキ科（ミズハハ、シロハハ、ハノキ、クロハハ、カンザハハノキ）；ヒイラギ科（ネズミモチ、ハナジヨウイボタ、キンモクセイ、ヒイラギモクセイ、ヒイラギ）；キョウチクトウ科（テイカカズラ）；スイカズラ科（コクハネウツギ、スイカズラ）

新潟日報の記事では、ツバキの下ツゲにも寄生していると記されているが、ツゲではなく、イヌツゲである（取材当日寄生したイヌツゲの枝を持参；写真参照）。

同種の分布については、北陸金沢のヒノキバヤドリギが記されているが、自然の樹林中ではなくて、庭に植栽された植木であること記されている（里見 1989）。新潟の場合も金沢と類似した状況であるので、苗木の生産地で寄生したものを新潟に運ばれたとみられる。明らかに人為的に導入されたと推定される植物を「県内希少種」と位置づけることにも抵抗がある。県内には、観賞用などで持ち込まれた種が、野生状態で発見されることも多い。そのような場合に「県内希少種」と表現することは妥当でなかろう。